

---

## 刊行にあたって

西暦 2000 年度の国立歴史民俗博物館・国際シンポジウムは、その討論のテーマを「東アジアの文化交流——儒教思想と民間説話——」と題して、2001 年 1 月 31 日から 2 月 2 日までの 3 日間、日本をはじめ、韓国、中国の研究者が参加して行われた。

歴博・国際シンポジウムの理念は、日本の歴史文化について、単に日本研究の視野にとどまらず世界的な、鳥瞰的な視点から内外の研究者を招いて、新しい課題を模索することにあると思う。その理念は、日本の歴史・文化をより深く知るために、地域、国境を越えた交流の歴史を探り、それぞれの地域の歴史的・文化的事象について類比や対比を見極めることへの機運が高まってきたことから出てきたものである。

日本の文化研究は、先史時代からのアジア地域との交流史を無視しては成り立たないことはいままでもない。今日、東シナ海や日本海などの海を隔てた地域との交流の実態をさまざまな角度から検証しようという学問的営為が盛んに行われている。今回のシンポジウムも、そのような機運を受け継いで、東シナ海を挟んだ文化交流の歴史について、歴史学、民俗学、社会人類学、口承文芸学の領域からのアプローチを目指すものである。

このシンポジウムの企画に関わった者として、まず考えたことは、東シナ海のほぼ中央に位置する地理的環境を利用して、日本、朝鮮半島、中国大陸と盛んに交易を行ったかつての琉球王国、現在の沖縄県・奄美地域、琉球列島を比較の中心に据えて、海を隔てた地域との文化交流の歴史を明らかに出来たらということであった。周知の通り、14 世紀から中国大陸との交流が緊密であった琉球列島の民俗文化は、日本本土と共通する文化的基盤を有しながら、大陸や朝鮮半島、また東南アジア地域などから受容したさまざまな文化的要素によって、日本列島のなかで独自の文化領域を形成している。

そのような地域的文化的特性の歴史背景を探る糸口として、儒教思想がどのように受容・普及し、それが家族、親族の構造に与えた影響を、中国大陸文化の周辺地域としての共通性をもつ朝鮮半島や日本本土、さらにベトナム地域との比較を行うことを考えたのである。そして、おなじく中国大陸の漢民族のみならず多くの少数民族の民間説話との比較研究が進んでいる口承文芸研究の分野からの討論が加わることで、このシンポジウムの企画は大きく膨らむことになった。

今回の討論は、2 つのサブテーマ、儒教思想と民間説話にしたがって、3 つのセッションにわけ、第 I セクションでは民間説話を中心とする報告と討論、第 II セクションでは儒教と社会構造を中心とする報告と討論を行った。そして、第 III セクションにおいては、文化交流研究の課題と方法についての問題提起と討論が行われた。

それぞれのセッションにおける報告や討論の前に、坂出祥伸関西大学教授に「民間信仰における

---

---

儒教と道教——中国・台湾・琉球——」, 伊藤清司慶應義塾大学名誉教授に「民間説話の伝播と変容」という各セッションにおける討論を活気づける示唆に富む基調講演をしていただいた。

中国, 韓国, そして国内の研究者の方々による研究報告や討論は無論のこと, フロアからの発言にもこのシンポジウムの企画に携わった実行委員会の意図をはるかに超える有意義かつ刺激的なものがあつたことは, このシンポジウムが将来の文化交流をめぐる研究に大きな展望を期待できるといふ確信につなげることができたとおもう。

平成 15 年 3 月

国立歴史民俗博物館名誉教授  
比嘉政夫